

2000年度 文教大学生生活科学研究所

## 公開講座記録

開講期間： 第1・2回 2000年7月 1日（土）  
第3・4回    〃   7月 8日（土）

テーマ： 家族の変容と病理

いま、家族が注目されている。少子・高齢化をはじめ、さまざまな社会問題が、家族をめぐる生起している。また、種々の社会病理現象の原因として、家族にその責任を帰する議論も少なくない。生活の基盤である家族のあり方が改めて問われているのである。

戦後の日本人の生活の歩みの中で、家族ほどその変貌の激しいものはないと言われている。この五十余年の間に、日本の家族はどのような変容を遂げたのか。危機に瀕しているといわれる家族は、どのような問題を抱えているのか。そして、家族はどこへ行こうとしているのか。

日本の家族の変容過程とそこに見出される病理を社会学、社会福祉学、臨床心理学などの視点から考察し、家族の将来像を展望する。

### ・第1回 『家族』と『幸福』の戦後史——郊外の夢と現実——

カルチャースタディーズ主宰  
マーケティング・プランナー 三 浦 展  
都留文科大学非常勤講師

日本の戦後の経済的発展は、より多くの大衆が、より豊かな生活をしたという素朴な欲求に支えられていた。アメリカの物質的な豊かさと科学技術力に圧倒された日本人は、みずからも高度成長期に技術力を向上させ、経済・産業を発展させ、生活全体を近代化し、豊かなものにしようとしたのである。

そこで経済・産業の発展とともに大きく変化したのが家族である。戦前の家族は封建的な家父長制に基づくものとして否定され、近代的な核家族が戦後の日本にふさわしい新しい家族のあり方として理想化されたのである。

その新しい家族の住みかとして選ばれたのが団地であり、郊外であった。住宅難に苦しんだ昭和30年代までの日本人は、より広く快適な住居を求めて働いたといっても過言ではない。住居の中には、洗濯機、冷蔵庫、掃除機、テレビといった家電が次々と買われ、「三種の神器」と呼ばれた。さらに昭和40年代になると「3C」つまりカー、クーラー、カラーテレビが大衆の夢になった。

このように戦後の日本人は、家電、自動車、住宅といった生活の物質的な構成要素を求めて、男性は会社人間になって仕事に励み、女性は専業主婦になって男性を助け、子供たちは親よりも高い学歴を求めて受験戦争を闘ってきたと言える。

しかし、現在、そうした物質的な豊かさが達成されているのに、家族はますます壊れていくように見える。もしかすると戦後の核家族は、経済成長という目標のために作られた幻想にすぎなかったのかも知れない。だから経済的な目標が達成されてしまうと、家族がまとまったり、家族の成員がそれぞれ努力する意味を見いだせなくなったのかもしれない。

本講義では、現在の家族を考える糸口として、戦後の日本人が憧れたアメリカの1950年代の家族の政治的・社会的意味を探り、さらに1930年代のアメリカの歴史をひもときながら、郊外に住む核家族というものが、いかにアメリカにおいて特別な意味を持ったかを解説する。

## ・第2回 マイ・ホーム・レス・エイジ——現代若者の心理学——

カルチャースタディーズ主宰

マーケティング・プランナー 三 浦 展

都留文科大学非常勤講師

現代の若者の行動には随分眉をひそめたくなるものがある。コンビニの前でも駅のホームでもどこでも座り込んで物を食べたり、授業中でも携帯電話が鳴ったり……。

もしかすると現代の若者は「マイ・ホーム・レス・エイジ」なのであろう。マイホームがない、ホームレス的な世代なのである。家族の崩壊が叫ばれ始めてすでに四半世紀。現代の若者はまさにその崩壊しつつある家庭の中で育ったのだ。離婚も別居も珍しくない。家庭内暴力もいじめも不登校も学級崩壊も日常茶飯事。そういう時代に育ったのである。

だから彼らが家族にあまり期待しないのは当然であろう。家族はつねに維持していくべきものではなく、いつ壊れてもおかしくないもの、あるいはすでに壊れているものとして彼らは認識しているのではないだろうか。

逆に言えば、彼らは家族というものによって苦しめられているのであろう。家族からの解放を求めているのである。戦後的な核家族と、その家族が住む郊外が、若者にとっては息苦しいものになっているのだ。なぜなら第1講で述べるように、高度成長期のように、家族が家族としてまとまる意味が現代では明確ではないからだ。

そして彼らはむしろ家よりも街に自分の居場所を見出している。家の中にも携帯電話と電子メールによって家の外とつながっている。そういうつながりを彼らは楽しんでいるように見える。

そのような観点から、若者が今最も好んでいる街、店をフィールドワークした調査に基づき、若者が今何を考えているか、何を求めているかを探る。古着屋、フリマ、高円寺、代官山、下北沢、カフェ、マイルーム改造など、最新の若者の流行をスライドを使って紹介し、その背景にある彼らの心理を分析する。

・第3回 社会的連帯の国、家族的絆の国、そして日本の家族

文教大学人間科学部教授 藤田雅子

1 物と便利さと引換に少子高齢化

20数回のバングラデシュ訪問を通して思うのは、家族の結束と互いの思いやりである。彼の国で「食」に加わるとき、過ぎし日に大家族で囲んだ食卓を懐かしむ。あの頃、飽食、高度医療、交通網などはなく、貧富の差は大きく、「清貧」という言葉が生きていた。

高度経済成長期に、多くの先進国は男女共に働く道を選んだ。日本は女性の社会参加を拒み、男性は長時間労働や単身赴任など家庭から離れていった。日本の経済成長[モノ+サービス=利潤]は、家庭に無関心な夫[労働=企業戦士]と社会から隔絶した妻[家事+育児=専業主婦]に分断した。[家事+育児+労働=働く主婦]は、男性中心の職場に挑んだ。介護問題は事業主婦を老親の介護に向かわせ、働く主婦を職業断念の危機に陥れる。利潤を追って、バブルがはじけて、少子高齢化と人間関係の希薄さが残った。

2 社会的「ゆとり」は普通の生活保障

北欧とくにスウェーデンを度々訪れて感心するのは、[モノ+サービス=利潤+公的サービスの財源]という図式である。男女共に納税者で、国家という家に住む国民の連帯のために、所得の再分配によって「ゆとり」の仕組みをつくった。男女共に働いて子育て、労働と休息の権利、人生の基礎を作る教育、生活が営める住環境、老後も住み慣れた家でホームヘルプを受けて生活できる約束など、普通の生活保障を社会の連帯でつくった。

家事、育児、介護は女性の役割と思ひ込む男性が主導権を握る国では、儲けた利潤は個人と企業で山分けをし、「ゆとり」の意味がわからなかった。女性の育児や介護の働きが限界に達した場合のシェルターとして、社会福祉を位置づけてきた。老人の「福祉施設移住計画」はとどまるところを知らないし、親から虐待を受けた子どもを待つのは、児童養護施設というシェルターである。規則づくめで集団主義の施設に誰が入りたいのか。

3 社会病理を救うのは社会の連帯か、家族の連帯か

スウェーデンやバングラデシュでは、子どもは生き生きしており、大人や社会に反感を抱かない。スウェーデンでは学校教育を修了すれば、男女共に納税者になり社会を支え、バングラデシュでは家族を支える。子どもは人生が見通せるし、親は親業の卒業がわかる。

日本で社会病理を救うのは、家族の結束か社会の連帯である。贅沢を味わった後では「清貧」に戻れない。社会の連帯で解決するにも、就業しない半数の女性は、税金、社会保険料、介護保険料を納めないがサービスを受ける権利をもつ。この配偶者は税制上の控除などによって優遇される。人生の選択という大義名分は、非納税者とサービス受給者を増やす。

高齢化によって労働力が不足する時、労働力を輸入するというが、国内で労働も納税も免除される「社会的不平等」を放置したままでは、容易には社会の連帯は望めない。

家族的にも社会的にも、人間的な希薄さや孤独を埋めるシステムは未完のままである。

少年非行に及ぼす家庭の影響は、計り知れないものがあるが、この家庭の影響を客観的に、納得ができる形で測定・診断することは、かなり難しい作業である。

非行少年の親には、自分の家庭に問題があることを理解していない者が多い。薄々は理解しているが、そうであることを認めようとしないう者が多いと言ったほうが、より正確であろう。また、わが子がSOSを発信し続けているにもかかわらず、それに気づかず、大きな事件を起こされて初めて、「うちの子に限って」とか「そんなはずではなかった」とあわてふためいている親が、実に多い。こうした親のあり方が、少年をして「非行からの回復」を遅延せしめていると言っても、過言ではない。

少年非行に及ぼす家庭の影響をうんぬんする場合には、家庭機能を両親の役割や機能としてとらえ、これを二つの接近法によって分析すると、とても便利で、効率的である。一つの接近法は、両親の役割・機能を横断的、力動的にとらえるやり方で、河合隼雄が唱えた、父親に求められる父性原理（切断する、突き放す、「是は是、非は非」、理性的、進歩的、「良い子だけが、わが子」）と、母親に求められる母性原理（連結する、抱きかかえる、「是も、非も是」、感情的、保守的、「だめな子も、わが子」）の二つの視点から、両親が、どのように少年にかかわっているかについて分析することである。非行や神経症など逸脱行動や精神障害に陥る少年の家庭にあっては、この二つの原理がアンバランスに機能し、どちらか一方が弱過ぎたり、強過ぎたり、あるいは両者が逆転している場合が、しばしば見受けられる。

もう一つの接近法は、両親の役割・機能を縦断的、発達のにとらえるやり方で、両親が、どのように少年の発達課題の達成に関与してきたかについて分析することである。本人の発達において両親とのかかわり合いが特に重要となるのは、幼児期、すなわち、エリクソン・E・HのいうⅢ期（移動・性器期：自発性対罪／目的、基本家族）までである。中でも、決定的に重要であるのは、「基本的信頼感」が形成されるⅠ期（口唇＝感覚期：信頼対不信／希望、母性）である。この期の発達課題は「信頼対不信」であるが、母親から十分に愛され受容されたことのない少年は、対人不信感を募らせ、否定的な自己像を形成し、自分は役に立たず、生きていても仕方がない、だめな人間だと思い込み、斜に構え、世の中に背を向けてしまうのである。

この講座では、事例として神戸の男子中学生による連続児童殺傷事件の加害者、少年Aを取り上げ、本人の身の上で起こった、いわゆる「出来事」と「両親の養育のあり方」との関係进行分析し、解説する。